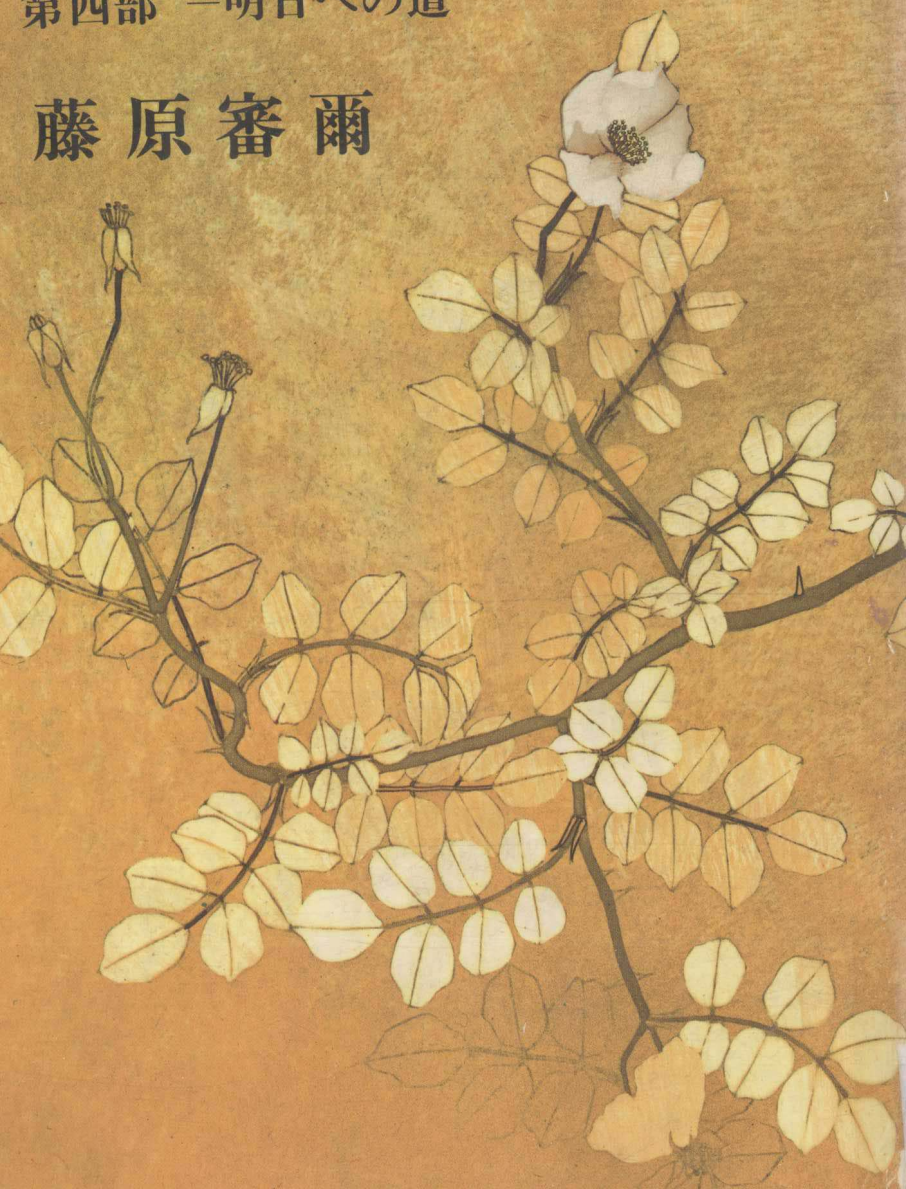


さきに愛ありて

第四部 —明日への道—

藤原審爾



さきに愛ありて

第四部 ー明日への道ー

藤原審爾

新潮社版

さきに愛ありて

第四部 明日への道

昭和五十一年二月十五日 印刷
昭和五十一年二月二十日 発行

定価六五〇円

著者 藤^{ふじ}原^{わら}審^{しん}爾^じ

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話営業〇三二六六―五一一
出版〇三二六六―五四一―
振替東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、小社通信係宛御送付下さい。
い。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

花々のころ

五

道のうねり

三四

日々新たに

六

樹かげ

三

樹かげの中

二八

陽は移る

一四

また陽はもどる

一七

裴
頓
田
洵
俊
夫

さきに愛ありて

第四部 明日への道

花々のころ

いくらか夜が短くなり、五時をすぎてしばらく経つと、夜が白みはじめる。暗い殺風景な部屋の中に、天窓から灰白い光が流れこみだし、ベッドの霧子のまわりを、徐々に明るくして行く。暗がりの中から、霧子の寝顔をうかびあがらせる。徐々に静かに暁方の冷込みがおとろえて行き、やがて霧子はベッドの中で身じろぎしはじめた。目が覚めかけたのである。

昨日、二カ月間にわたった、島を守るたたかいがおわり、祝いの会があり、家にもどってきたのは、もう十一時ちかい時だった。馴れぬ酒をのまれた霧子は、家に帰り、湯に入ってから寝たのに、いつもよりずっとはやく目を覚めた。今日は日曜なので、このところずっと出かけていない伊沢のところへ行く予定である。それに薬局へ薬をとりに行かなければならない。夢中ですごしたこの二カ月ほどの間の苦勞が実を結んだので、解放されたような気分がひろがり、それが却って霧子をぐっすり眠らせてくれない。しばらく霧子はうとうとしていたが、そのうちはつき

り目が覚め、時計をみた。六時をすぎたばかりである。

実際、この二カ月ばかりというもの、島は島ごと揺れているような、はげしい騒ぎが続いた。毎晩、若い連中は公民館にあつまり、氣勢をあげた。これまでの頑固な年寄たちとのたたかいとちがひ、外に敵があるので、気持ちに屈折がおこらない。たたかうことが心を高揚させるので、氣勢が日に日にあがる一方だった。

村議をたてに、山根たちは県警から警官たちをよび、村長一派の警備をさせたりしたが、子供たちは学校へ行くことも出来ない。村議たちが、つきつきに辞表をだし、村長リコールの署名がはじまった。中でも旅館をやっている潮見は、女中たちもいなくなり、島では物を売ってくれる家がなくなり、毎日、船で買出しに行かねばならない。警官達は十人ばかりも泊っているし、買出しもらくではない。とうとう音をあげ、島中の家族と一緒に島から竹原へ逃げだしてしまった。山根一家は孤立してしまい、リコールを待たずに辞任し、一家は岡山へ移住していった。

一カ月ほどの間、村長一派へ夜討朝がけがつづき、その間、毎日のように公害防止の運動家や政治家が島へやってきて、激励演説をやって行く。氣勢があがるにつれて、診療所は日ましにこそがしくなる。ともかく怪我人が続出する。車が岸から落ちたり、衝突したり、喧嘩で手傷を負うたり、とりわけ親の目が行き届かなくなった子供の怪我が多い。これまでのように、何人もの連中が子供を連れてくるふうではなくなり、守る会の若い連中が、自転車にのせて、「先生、診てつかあせえ」と連れてきておいて行く。時には連れにくるのを忘れるので、霧子が今度は子供

を送りどけなくてはならない。それに治療中の患者が、氣勢のあおりをうけて、治療を途中でやめるので、こっちから診にいかねばならない。目のまわるようないそがしきがつづき、やっと山根が辞任し、島の騒ぎは静まった。山根辞任と同時に、今度は煙突島との交渉がはじまった。

山根辞任で、山根が島から出て行くのと同時に、煙突島でも工場長が転勤し、会社側の態度が急にあらたまり、買上げた土地を使用する場合には、島を守る会と交渉し、島民の迷惑にならぬよう留意するという文書を、本社から工場長はとってきた。

それで漸く島の連中は、一応安心出来る回答を得て、たたかいにピリオドをうったのだった。その二カ月ほどのたたかいのうちに、瀬戸内には春の風がおとずれ、漁期が近づいてきて、関心はそこへひきもどされ、昨夜、島を守る会は、戦線縮小の宣言をして、新たに島のための会と改称し、その祝いの会をしたのだった。

なにかやっと終ったという気持ちだが、ベッドの中の霧子にひたひたとおしよせてくる。しかしそれは、なにか空虚なものを抱えこんでおり、簡単に満ち足りた気持ちを誘ってくれない。それがなぜだか、霧子にはわかつている。たしかに島へ来てからの生活は、いそがしくあわただしくはげしくて、あつという間にすぎていったが、特筆出来るような変化が自分の中でおきたとは思えない。そしてもう間もなく、新しい看護婦さんがきて、霧子は島を去って行くことになる。

そのうらさみしい想いで、霧子は、漸くベッドから起きだした。一番の定期便にのるためには、そろそろ起きだしたほうがよい時間だった。

朝食後、奥さんから買物のメモと金を貰い、先生からは伊沢への手紙をあずかり、霧子は久しぶりにちゃんとした服を着て、

「いってきます」

「今晚は泊って、明日、昼までに戻ってくればいいよ」

はいと答えて、霧子は診療所から出た。ちょうど讃岐屋の前までくると、待合室の石油ストーブの横のベンチに腰かけているおたい婆さんと正造の妻の明子が、目に飛びこんできた。むろん霧子は、おたい婆さんが病院に連れて行かれるとこだなと気がついた。ああよかったと笑顔になったが、霧子は知らんぷりをして、待合室に入りながら、おたい婆さんへ、

「あら、どこへ行くの」

と声をかけながら、その隣りへ腰かけた。むこう隣りに腰かけた明子が、

「宮島へお詣りにいくんですらァ」

といそいで返事をした。

「日帰りで？」

「広島へ一泊して帰ろう思うとるんよ、万城さんは何処へな？」

「薬をとりによ」

表の船のほうから、さあ乗りんさいという声が聞え、明子がすぐ立ちあがった。大きな荷物を二つ持っている。万一、入院という場合のことを考えての荷物らしかった。

「お婆ちゃんはわたしがひきうけるわ」

霧子は切符を買い、急いでおたい婆さんのところへ戻って、手をとった。

「いそがなくていいのよ、お婆ちゃん」

「すまんね」

おたい婆さんは、このところすっかり視力が衰えている。節くれだった、あかぎれがまだのこった大きな掌で、霧子の手をとった。ずいぶん力があつた。そして歩きだすと、そつと霧子に言つた。

「うちやあなあ、行きとうねえンよ、ここで死にてえンよ」

朝の一番の定期便は、市へ遊びに行く連中が乗りこむので、かなり混んでいる。その連中のことがわかつているので、

「まだ、佐山の伴が来とらんど」

とか、

「小出さんもまだじゃ」

などと仲間の言う声がし、船は遅れた客たちを待つて、なかなか出航しない。そのうち自転車、小出が駆けつけ、佐山の息子の三郎が、息せき切つて船へ飛びこんで来て、漸く出航の汽笛

が鳴る。

朝の気配が立っている海面を、定期船はゆっくり動きはじめる。

おたい婆さんの目のことは、島にひろまっている。そのおたい婆さんを、看護婦の霧子が連れて、船に乗ったので、多分、いよいよ市の病院行きだなと思ったのだろう。船室へ入ると、窓際のよい席にいた高校生が二人、すぐ立ちあがって、

「こっちへ来んさい」

と席をゆずってくれた。

大きな荷物で、おたい婆さんの席をとって待っている明子へ、霧子は、ここへ腰かけると合図して、おたい婆さんと一緒に腰を下していた。

外の風はまだ寒いので、船室はかなり混んでいる。ざわめきで落着かないのだろう、おたい婆さんはまだ霧子の手をしっかりと握ったままだった。

病院で実習していた頃、手術した小さい女の児に、手術の間中、しっかりと指を握られていたことがあるが、こんなふうにしっかり掌をにぎりしめられたのは、はじめてのことである。みんながおたい婆さんの身を案じて、うまくごまかして連れだしたのだが、おたい婆さんはあれこれ策をつかわれることで、かえって病状を深刻に思いこんでしまったのだった。そして多分、自分のいのちのことよりも、正造や嫁の明子が冷いというしろ指をさされたりしないように、こうして病院に出かける気になったにちがいない。しかし、家と家族に一生を捧げたのに、その家や家族た

ちと別れて、病院暮らしをし、そこで死ぬ気になるためには、幾山河の悩み悲しみがあつたにちがいない。

おたい婆さんは、正造や子供たちの名譽のために、さらに大きく深い犠牲をはらおうとしているのである。もうずいぶん長く生きたのだし、もう家族たちのために、なにもしてやることが出来ない。自分がしてやれるのは、これしかないと思いながら、独りさみしく死ぬことを怖れているのである。まるで子供のように霧子の手を、しっかりとにぎりしめている。そこからおたい婆さんの、不安におびえた心が霧子の中へ、ありありと流れこんでくる。

むろんおたい婆さんは、考えちがいをしている。おたい婆さんの目が、公害のせいなのかどうか、まだはつきりわかつているわけでもなければ、目が公害のせいだとしても、死ぬとはかぎらない。たとえ公害の魚のせいだとしても、家の商売がたち行かなくなるとはかぎらない。魚は汚染度の低いものもあるのだし、商売を変えるところで、なんの役にも立たない。おたい婆さんの心に届きはしない。それはちょうど、重症の患者そっくりだといってよい。薬はたしかに効くもの

ではあるが、重症になれば薬の効用を生かす力がなくなるのである。おたい婆さんもそうなのである。もう永い歳月、次第に目が見えなくなっていく間中、目が見えなくなるのではないか、公害のせいではないだろうか、公害だとわかれば干物製造の商売はつづけられなくなる。暮らしは苦しくなる。目の見えなくなった年寄などは、邪魔者にされるのではないだろうか、などなどと心

をさいなめつづけてきて、うちのめされてしまっているのである。そして最後の勇気を、家と家族のために、ふるっていま病院へ行こうとしているのである。もうどんな言葉も、おたい婆さんに効くことは出来ないだろう。

それにしても、こんなふうな弱い年寄の心をさいなめている苦悩を、誰も助けることが出来ないほど、人間の世界はつまらぬものののだろうか。会社の利益のために、有害な廃液をたれ流していることが、こんな苦悩を人々に与えている事実を、なぜ見て見ぬふりが出来るのだろうか。いったい政治家たちは、どうしておたい婆さんのような人々のはげしい苦しみを知らんぷりしていられるのか。

いきどおりとやるせないもどかしさが、次第に霧子の中でわきあがり、霧子は大きく息をすいこんだ。

お婆さん

言ってやるのよ

わたしは一生、いっしょうけんめいに働いた

働いた分を全部もらったことなんかありはしない

三分の一は、しほりとられ

三分の一は、世の中の人の為になってるじゃないか

それなのに、こんなでは、あんまりだと

言つてやるのよ

霧子は、こまかく幽かに、膚が慄えた。そしておたい婆さんの顔を、さあとはげますように見た。

おたい婆さんは、見えない目をあけ、なにを見ているのか、なにを考えているのか、見当もつかない顔で、凝つと前のほうをみていた。顔いっぱいにある深い皺が、かたまつたようになり、革でつくつた顔みたいだった。革の顔みたいな奥には、いましつかり霧子の掌をにぎっているような心があるのだが、そこまでそのはげましも届きそうになかった。

いったい、なにが

このおたい婆さんの心に

とどくのだろうか？

おたい婆さんが霧子の掌をはなしたのは、定期船が栈橋につき、遊びにきた客たちが船を傾かせながら、栈橋へ飛びだしてからだった。

霧子が、むこうの明子へ、

「一番あとから下りましょうよ」

と声をかけてから、おたい婆さんは、いそいで霧子の掌をはなした。明子に霧子の掌をにぎり

しめているところを見せてはまずいと思ったふうでもあり、そうではなくて、とうとうここまできてしまった。もうくよくよすまいと思い定めたようでもあった。

はつきり霧子は、おたい婆さんの心のこまかいはたらきを感じながら、最後の客になって、おたい婆さんと一緒に栈橋へ下りた。

もう明るい春陽があたりっており、おたい婆さんはいくらかあたりが見えるようになったらしかった。

「どうも世話になったのう」

栈橋から広場へ出ると、おたい婆さんがすぐ礼を言った。

駅まで行くバスが、広場の端のところで、乗客たちをのせはじめている。明子も、両手に荷物を持って、

「助かったわア」

と礼を言いだしたが、その時にはもう霧子は、おたい婆さんの腕へ手をそえて、バスのほうへ歩きだしていた。

おたい婆さんが不自由な目のために苦労するのは、これからあとの駅についてからである。

「駅まで送るわよ」

霧子は、いつの間にか、その気になっており、そのままバスへおたい婆さんと一緒に乗りこみ、駅まで出かけていった。